

村串仁三郎教授最終講義の記録

著者	村串 仁三郎
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	73
号	3
ページ	1-31
発行年	2006-03-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/5259

第一部

村串仁三郎教授最終講義の記録

開催日：2006年1月10日（火）

場 所：法政大学多摩キャンパス経済学部棟306教室

学部長挨拶：絵所 秀紀 教授

業績紹介：飯田 隆 教授

講義テーマ：ジョン・ラスキンの経済学と労資関係論
——「その最後の者にも」第一論文を読む——

司 会：教授会主任 佐藤 良一 教授

付 録：経歴・著作目録

1 ラスキンについて

ラスキンとの出会い

私は、今日この日を最後に法政大学経済学部を定年退職して去ります。記念すべき最後の講義に何を語ろうか、いろいろ思い悩みましたが、永い研究で置き忘れてきたこと、あるいは見過ごしてきたことを論じたいと考えたときに、ジョン・ラスキンを思いついたのです。もっとも私は、ジョン・ラスキンについて幾ばくか研究してきたというのでは全くなく、むしろ何も研究したことがありません。

では何故ジョン・ラスキンか、ということになりますが、その理由は、幾つかあります。一つは、イギリスに滞在していたときに、ラスキンという人が、いろいろな分野に顔をだしており、大変興味を惹かれたからです。

オックスフォード大学に行けば、1899年に設立されたラスキン・コレッジというのがあります。当然大学にとって何か由緒ある人だったのだろうと思いました。私の住んでいたシェフィールドの町の真中にジョン・ラスキン協会の建物があって、これは何だろうと思いました。

湖水地方に遊びに行って、ふとあるタテ石を見ましたが、そこにジョン・ラスキンの言葉が書いてありました。この人は自然保護を主張した人だな、と想像ができました。湖水地方の西側のコーニストンという閑静なところにラスキン・ミュージアムがありました。

そこでこの人物がどういう人かおおよそわかりました。それは 今から15年前のことでした。つまり私は、ジョン・ラスキンという人について15年前は何も知らなかったわけです。それなりにイギリスの社会思想史を勉強してきたつもりですが、日本で教えるイギリスの社会思想史の中では、ラスキンは全く無視されるか、人の注意を惹くほどに扱われていなかったからでしょう。

ラスキンは1819年にロンドンに生まれました。マルクスは1818年のドイツ生まれで、1849年6月にロンドンに移住し、確か1883年にロンドンで死ぬまでイギリスに滞在していた筈です。二人は、同時代人でありながら、お互いに全く関心を示さなかったようです。マルクスとラスキンの膨大な文献、資料にはお互いについて一言も出てこないらしいのです。果たして両者はお互い知らなかったのか、無視しあったのか分かりませんが、不思議なことです。

それより不思議なことに、日本ではラスキンは、経済学者としては全く無視された存在だということです。名前くらい知っている経済学者はいるでしょうが、ラスキンがどんなことを論じたかを知っている人は、ごくまれです。そうした雰囲気の中で、私が、若い頃からラスキンについて全く無智だったのはむしろ当然というものです。

ラスキンへの関心

私が、ジョン・ラスキンを意識し、興味をもつようになったのは、日本の国立公園成立史の研究をはじめた10年くらい前のことです。

日本の国立公園史の研究をやっていると、二つのところで、ジョン・ラスキンに出会いました。一つは、日本の登山史の中にジョン・ラスキンが出てきます。例えば日本の登山文学の元祖、小島烏水という人は、ジョン・ラスキンの『近世画家論』（『世界大思想全集』、昭和7年訳本出版、原題は Modern Painters だから「現代画家たち」と訳したほうがよいでしょうが、）の愛読者で、「ラスキンの山岳論」を書き、山岳美を称賛するネタをラスキンに求めていました⁽⁴⁾。

従って明治末から大正昭和にかけて、登山家や文人には、この Modern Painters が相当に読まれたようです。私は、近代登山と登山家の自然保護の関係でラスキンを知ったしだいです。

もう一つは、私が、イギリスの国立公園史や自然保護史を研究しているときにやはりラスキンに出会いました。イギリスのナショナル・トラストの前身であり、自然保護運動の先駆的な組織であるコモンズ保存協会の設

立にラスキンが関与していますし、さらにその前に湖水地方の開発に反対し、地域内への鉄道敷設反対運動の先頭になっています。ラスキンはナショナル・トラストの設立にも絡んでいたことを知りました⁽²⁾。

最近読んだイギリス人のジョン・ペイトという人の『ロマン派のエコロジー』では、ラスキンは「イギリスの代表的なエコロジスト」とであると評価されています⁽³⁾。この本を読むとその理由がよくわかります。

そうした理由で、私のラスキンへの関心が、自然保護の問題で近年にわかに高まってきました。

ラスキンは、1819年にロンドンのシェエリー酒輸入業者の子として生まれ、スコットランド出身の家父長的に厳格な父と典型的なピューリタンの母により、幼少から家庭教師がつけられて、ラテン語から宗教、美術まで厳しく教えられて、7歳にして作詩をし、14歳の時にヨーロッパへのグランドツアーを経験し、15歳から詩や評論を雑誌に投稿するという風に早熟に育ったようです。17歳の時にオックスフォード大学に入学して、23歳の時学位をとり、24歳の1843年に『近代画家論』第1巻を出版して名声をえ、以後積極的な著作活動を展開し、当初は美術、建築についての評論で名声を博していきますが、1855年からカーライルに私淑して、日本でもよく知られている弟子のウィリアム・モリスと労働者教育に関わりながら、経済学の研究をはじめます。

経済学関係の著作では、1857年に『芸術経済論』⁽⁴⁾を出版し、1860年に『この最後の者にも』を『コーンヒル・マガジン』誌に連載して、古典派経済学を手厳しく批判して猛反撃をうけ、4回で中止を迫られました。1871年に労働者階級に宛てた書簡集『フォルス・クラヴィゲラ』を、またラスキンの経済学の本命と目されている『ムネラ・プルウェリス』を1872年に出版しました。ラスキンは、こうしてヴィクトリア時代の太思想家として世界に名を轟かせていくことになります。しかし20世紀に入ってラスキンの名は次第に忘れられていくことになります⁽⁵⁾。

日本におけるラスキン研究

そこで日本におけるラスキン研究を覗いてみました。結構日本でもラスキン研究は徹々たるものですが存在しています。しかしそれは、スミス、リカードといった古典派経済学者、マルクス経済学などについての研究と比べると全く比較にならないくらい少ないのです。

何故そうなのか、一つ大きな疑問ですが、一口に言えば、戦後1960年頃までは、日本ではマルクス経済学が優位に立っていて、マルクス以外の学者に殆んど興味を示さなかったという事情やマルクス経済学の源流である古典派経済学は研究されても、近代経済学でさえあまり研究してこなかったという異常な事情があったからでしょう。いわんやジョン・ラスキンなどという『近世画家論』の著者が経済学者であるとは誰も思ってもいなかったのでしょう。

しかし日本でもほんの一握りの人たちが、ラスキンをちゃんと研究していたのです。その一人、大熊信行という経済学者は、当然マルクス経済学者ではありませんが、昭和2年に『社会思想家としてのラスキンとモリス』を刊行しています。大熊が後に配分理論を展開するヒントをここに見出したと言われています。また御木本隆三という人が昭和2年に『ラスキン研究』を出しています⁶⁾。

日本におけるラスキン研究の第一人者 木村正身氏によりますと、大熊、御木本らは、マルクス主義に対抗する改良主義、人道主義としてラスキンに注目したようですが、しかし必ずしも肯定的に問題にしなかったようです。もっと興味深いのは、マルクス経済学者の河上肇が大正12年に出版した『資本主義経済学史的発展』の中で、ラスキンを取り上げていることです。もっとも河上は、ラスキンの人道主義の限界を批判するだけで、ラスキンの提起した今日的に重要な論点を斥けてしまったようです⁷⁾。

こうした事情を考慮すれば、ラスキンも隅においておけない問題の経済学者のように予感されます。

そこで戦後日本でのラスキン研究を一瞥してみたいと思います。私が大

変驚いた研究が、木村正身という人の研究でした。木村氏は、ラスキンの主著『ムネラ・プルウェリス—政治経済要議論—』の翻訳を1957年に出版していますが、その解説は、日本におけるこれまでのラスキン解説の中で最もすぐれた信頼できるラスキン研究となっています。私も、木村氏の解説を読んで、ラスキンが今日只ならぬ人であると知らされました。ここでは木村氏のラスキン論を紹介する暇がないので、ぜひ木村氏の解説を参照することを奨めておきます。

五島登氏も、中央公論社の『世界名著』シリーズのラスキン、モリスの巻で、両者についての解説を書いています。これも立派な論稿で、ラスキンについていい紹介となっています。

ごく最近、注目すべきラスキン研究が現われました。マルクス財政学者池上悌氏の一連ラスキン研究です。以前私がレジャー論を研究していた際に、レジャーの非市場主義的な分野として文化、芸術に注目して文献漁りをしていた時に、池上氏の『生活の芸術化』という本を古本屋で手にしたのですが、副題に「ラスキン、モリスと現代」とあったので喜ん買って帰り一気に読みました⁽⁸⁾。

そこで池上氏は、ラスキンの経済学を巧みに紹介し、古典派経済学の労働価値論とは全く異なったラスキン「固有価値」という価値論を肯定的に紹介しています。またラスキンの経済思想を土台にして文化を重視する経済学を主張しています。そのほか、『文化と固有価値の経済学』を出版し、ラスキンの固有価値論を土台にして、文化芸術とラスキン、あるいは経済学と倫理、環境問題などとの関係についてラスキンをつうじて論じています⁽⁹⁾。ここでは、ラスキンが現代の社会経済問題を解決のために大きな石杖になることを示しています。

また西川潤氏の『人間のための経済学』の中で、ガンジーがラスキンの『この最後の者にも』を読んで感動し、自分の思想の土台にしていることを知らされ、ラスキンが人間のための経済学の下敷きになっていることを知って更にびっくりしました⁽¹⁰⁾。

私は現在、日本ホスピタリティ・マネジメント学会というのに入っていますが、最近仲間3人ほどで、「ホスピタリティの経済学」が成り立つかどうかを研究しています。そのメンバーの一人飯岡秀夫氏は、もともとルソーの研究者ですが、学会でたびたびラスキンについて研究報告をしています。また小宮山康朗氏は、某放送局の研究所の研究員ですが、ラスキンを土台にガンジーやマリア・テレサを論じ「ホスピタリティの経済学」の構築を目指しています⁽¹⁾。今はささやかですが、これからラスキンを土台にした社会諸科学がたくさん噴出することになるでしょう。このほか、私が見落としているラスキン研究がたくさんあると思いますが、浅学ゆえお許しをねがいたい。

これらの研究で、ラスキンが、世界的に今日の偉大な人たちに、例えば、イギリス人のバナー・ショー、オスカー・ワイルド、さらに経済学者マーシャルなどのほか、トルストイ、ガンジー、新しいところではアマルティア・センなど、また日本では白樺派の武者小路実篤、民藝運動の柳宗悦、『日本風景論』の志賀重昂、登山文学の小島烏水、社会改良運動家賀川豊彦、マルクス経済学者河上肇などに大きな影響を与えていたことを知りました。それは何故か、いろいろな理由があると思いますが、ラスキンが、経済学の根本に正義と人間愛をおき、経済学を人間が幸せになるための学問と位置づけていることにあると思います。

こうした研究の刺激を受けて、ごく最近私も遅ればせながら、ラスキンの研究をはじめた次第です。少し前置きが長くなりましたが、本題に入りたいと思います。

《注》

- (1) 小島烏水『日本アルプス』、岩波文庫、近藤信行の解説、434頁。「ラスキンの山岳論」は、『小島烏水全集』第6巻、大修館書店、1979年、所収。
- (2) 拙稿「イギリスにおける国立公園思想の形成(1)」、『経済志林』第72巻第1・2号、を参照。
- (3) ジョナサン・ペイト『ロマン派のエコロジー』、松柏社、2000年、99頁。

- (4) 『芸術経済論』は、明治図書出版『世界教育学名著選』（1973年）シリーズ第18巻、『ラスキン・モリス』篇に収録されている。
- (5) 五島登「ラスキンとモリス」、中央公論社『世界名著』シリーズ41、『ラスキン モリス』篇の解説、木村正身訳『ムネラ・プルウェリス—政治経済要議論—』、関書房、1957年、「解説」などを参照。
- (6) 同上。
- (7) 木村正身の「解説」、前掲書、299-300頁。
- (8) 池上惇『生活の芸術化—ラスキン、モリスと現代—』、丸善新書、1993年。
- (9) 同『文化と固有価値の経済学』、岩波書店、2003年。
- (10) 西川潤氏が『人間のための経済学』、岩波書店、2000年。
- (11) 飯岡秀夫「ルソーとラスキン—『文明社会』に於る『自然』と『人間』の救済—」、『高崎経済大学論集』第47巻、2005年。小宮山康朗「『ホスピタリティ経済学』とは何か」、日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌 HOSPITALITY、第12号、2005年。

2 ラスキンの経済学『その最後の者にも』の第一論文を読む

今私は、ラスキンの経済学を全面的に論じる力も、研究成果もありませんので、ラスキン経済学の入門とも言うべき、『その最後の者にも』を読むことによって、ラスキン経済学の基本原理にふれてみたいと思います。ラスキンは、この論稿のほか、『ムネラ・プルウェリス』とうやや難解な本で自分の経済学理論を展開していますが、あまりに議論が多岐にわたるので、前者に絞って、ラスキンの学説を検討してみることにしました。しかも、私の専門分野である労働問題の観点からラスキンが労資関係をどうみているかという部面を中心に検討してみたいと思います。

ラスキンが1960年に雑誌に4回にわたって連載した『この最後の者にも』は¹⁾、副題にあるように「ポリティカル・エコノミーの基本にかんする四論文」であり、ラスキンの表題付けの流儀にしたがった分かりにくい表題のものですが、第一論文は「榮譽の根源」、第二論文は「富の鉅

脈」，第三論文は「地上を審判く者」，第四論文は「価値に従って」というものです。

今日の講義では時間がありませんので，経済学の原則と労資関係を論じた第一論文についてのみ論じてみたいと思います。

「序文」

まず「序文」ですが，ラスキンは，雑誌に公表したときに「大多数の読者によって，猛烈に攻撃された」が「わたくしがこれまで書いたもののうち最上のもの，つまり最も真実で，最も正しく述べられ，そして最も世を益するものと信じている」と自信のほどを披瀝しています。

さてこの序文でラスキンは，自分の論稿の「目的」を，第1に「富の正確にして確固不動の定義を示すこと」，第2に「富の獲得が結局は社会のある道徳的条件のもとにおいてのみ可能であることを示すこと」であると指摘しています。そして「その道徳的諸条件の第一は，正直ということが存在するということについての信頼と，実際目的としてさえそれが達成できるとする信頼とである。」とも指摘しています。

こうした主張を聞いて，私などマルクス経済学に親しんできた者にとって，ラスキンは初めから何かいかがわしい感じを受けてしまいそうです。と言うのは，「道徳」とか「正直」とか「信頼」とかという主観的なものは，経済学的な考察にとっては，二次的，三次的なものであって，経済学にとって原理的，かつ根源的な問題ではないと理解しがちだからです。だから聴講している諸君も，ラスキンは，大いに怪しげだと感じるのも当然だと思います。

なおラスキンは，この諸論稿で「労働の組織の問題」を留保し，別の機会に論じると指摘しています。別の論稿とは，『ムネラ・ブリウェリス』のことです。この本が実はラスキン経済学の本命なのですが，あまり多大なテーマを論じているので，ここでは検討を回避します。

ただしラスキンは，混乱をさけるために，予め自分の「政治的信条」を指摘します。その要点は，第1に，「全国にわたって，政府の費用で，政府

の監督下に、青少年を訓練する学校を設立すべきこと。」

第2に、「あらゆる生活必需品の生産および販売と、あらゆる有用な技術の練習のために、これらの訓練学校と関連して、これまたまったく政府の規制のもとに製造工場および仕事を設立すること。」

第3に、「いかなる男女、少年少女も職を失った場合には最寄りの政府の学校に収容し、試験のうえ彼らに適している仕事につかせ、毎年改訂する一定率の賃金を払うこと。」

第4に、「老齢でかつ貧困な者には、安楽と家庭とが支給されるべきこと。」であると主張しています。

これらの指摘は、今日的にみると、ごく当り前のようにも思えますが、さて19世紀中葉のヴィクトリア時代には決して常識的な論点ではなく、自由市場主義の古典派経済学にとっては、厳しく論難されるべき主張だったのです。この点はすぐ後に問題になります。すでに常識をくつがえすラスキン経済学のすごさがちらついていますね。

第一論文「榮譽も根源」の論旨

いよいよ本題には入りましょう。

ラスキンの経済学は、副題から分かるように「経済学の基本原理」にかかわる問題を論じるわけですが、それは古典派経済学の根底的な批判です。これは、マスルクが古典派経済学を土壌にして、古典派経済学の諸原理を利用し、修正して自分の経済学を形成したのと違って、ラスキン経済学は、古典派経済学の原理を全面的に否定し、そこに全く彼らと異なった経済原理を提起したのです。そうした意味で、間違えば全くのナンセンスに終るか、あるいは何か全くすごいものが現われるか、確かに緊張させられるところです。

さて第一論文「榮譽の根源」では、どんな基本的な原理が提起されるのでしょうか。

結論を先に指摘してしまえば、ラスキンは、「経済人」の利己心にもとづいて経済が運営されるべきで、そこに道徳とか正義を持ち込むべきではな

いという古典派経済学の学説を批判し、経済関係を野放しにしておけば弱肉強食の世界が出現し、多くの人間の不幸を生み出す、従って経済関係において、資本家や商人は、正義、愛情、人間的な道徳心をもってことにあたらなければならないと説くのです。

第1パラグラフ。古典派経済学の批判。

ラスキンは、まずここで古典派経済学を厳しく批判することからはじめます。すなわちラスキンは、現代の political economy（政治経済学）という自称の科学は、「社会的活動についての有利な規則が 社会的な情愛の力とは無関係に決定されうるという考えにもとづいている」と特徴づけています。

そして経済学者は、「社会的愛情 social affection は、人間の本性の中では偶然的で攪乱的な要素であるが、食欲と進歩への欲望は不変の要素である。」と考え、「人間を単なる食欲な機械と考えて、労働、購買、販売のどんな法則に従えば、最も大きな富の蓄積が得られるか検証してみよう」と主張すると指摘しています。（なお訳者は、affection を愛情と訳したり情愛と訳したりしていますが、私は、一貫して愛情と訳しておきます。）

ラスキンは、経済学者が「社会的愛情」を無視することに反対し、「人間を単なる食欲な機械と考え」、「最も大きな富の蓄積」を追求することを「検証」しようとする経済学を否定し、利益第一主義、物欲主義に反対しているわけです。確かに常識的な意識からすれば、利益第一主義はいけなように感じられますが、しかしそうした常識的な民衆の気持ちを経済学理論に仕上げることは大変難しいことです。とくに19世紀のビクトリア時代には。

ところがラスキンは、この問題に正面からぶつかっていきます。ちなみにノーベル経済学賞をえたインド人のアマルティア・センが、ラスキンの影響を受けて、貧困を解決するために営利主義を排するとか、福祉を重視せよと言っても誰もびくくりしなし、それほど反対もしないでしょう。しかし19世紀にもし、センの学説が提起されたとすれば、古典派経済学者か

ら袋叩きにあったでしょう。ラスキンは、20世紀後半の世界が抱える貧困の克服、福祉の充実、人間の幸せという政治経済学の課題を提起していたのです。

第2パラグラフ。ここでは説明することは何も述べていません。

第3パラグラフ。経済学の前提条件について。

ラスキンは、「経済学の前提条件」としての「社会的愛情」を提起します。近代の経済学は、「人間が骨格をもっていないと仮定した体育学」のように、経済学の「前提条件」として、その体育学が無視した「骨格」であるべき「社会的愛情」を無視していると指摘します。ラスキンは、「社会的愛情」を彼の経済学の「骨格」に据えたのです。

ラスキンに対する評価は、こうした考えを認めるか否かで大きく分かれるのです。

第4パラグラフ。労資関係の対立について。

ラスキンは、労資が対立してストライキを戦っているとき、「経済学者は無力であり、政治的に沈黙している。」「どんな政治関係科学をもってしても、両者を一つにまとめることができない。」でいると指摘し、雇用主と被雇用者の関係、つまり労資関係に着目します。さてラスキンは、労資関係をどのように解析するのでしょうか。

第5パラグラフ。雇用主と被雇用者の利益対立。

ラスキンは、マルクスのように「雇用主の利益」と「被雇用者との利益」が相対立することを認めます。しかしラスキンは、その対立を「絶対的に、あるいはつねに相反しなければならないはずのものでもない」とみなすのです。ここがマルクスと違うところです。

飢えた親子が一片のパンをめぐる利害の対立があるにしても、両者は、反目して戦わなければならないわけではないと主張します。比喩がちょっとお粗末ですが、ラスキンは、第1段階では、労資関係を根源的には、人間同士あるいは家族と同じものとして把握しようとするのです。

ここら辺でマルクス主義をかじった人は、ラスキンが労資対立の厳しさ

を、母親と子供の関係で解くなどとは、金持ちのインチキっぽくて甘いエセ経済学者だと思ってしまふでしょう。昔の秋であればそう考えたでしょうね。しかしラスキンの労資関係の認識は、そう甘いものではありません。

ラスキンは、雇用主と雇用労働者の関係の分析にすすみます。

第6 パラグラフ。労資の対立と利益の一致。

ラスキンは、「雇用主と労働者の利益が同じであろうとも、また相反していようとも、事情如何によってはそれはどちらともなりうるから」、「人間が鼠や豚とかわりない道徳的な力によって動かされると考える」ことは、「便利」だが「証明されえない」と指摘します。

要するにラスキンは、確かに「事実、仕事が正しく果たされ、それに対して正当な価格が得られるということは、つねに両者に利益である。」ということを確認します。しかし他方で「利潤の配分にあたっては、一方の利益は他方の損失であることもあり、そうでないこともありうる」と指摘します。とくに後者の例として、経営者が経営に失敗すれば、「労働者の利益にはならぬ」いからです。

以上のように、ラスキンは、両者の対立の中に 積極的に利益の一致点を見つけようとします。明らかにラスキンの労資観は、労資協調主義です。マルクス主義からみれば、労資協調主義は悪であり、労働者を裏切る思想ですが、そうした立場に立たなければ、それなりに興味ある思想です。

ラスキンは「安い賃金を支払ってそのために労働者が病気になって元気がなくなれば、それは、その雇主の利益にならないし、また高い賃金が支払われても、その雇主の利益が少なくて、彼の事業を拡張していくことができなければ、それは労働者の利益にならない。」と言います。

ここでラスキンの労資協調論の特徴は、資本家に妥協的で彼らの非常さを無視したり軽視したりする親資本家的なものではなく、むしろ資本家に厳しいものであると確認しておかなければなりません。日本の労資協調論

は、しばしば資本家、経営者に甘く労働者に厳しいものです。ラスキンは違います。

第7パラグラフ。労資関係に「正義」を持ち込む。

ではラスキンは、そうした労資の利害の一致と対立の関係で何が問題だと言うのでしょうか。ラスキンは、「これらの相互の利益に影響する事情はさまざまでかぎりが無いから、行為の基準を損得のバランス balance からひきだすのは無意味である。」と答え、「行為の基準」を「正義 justice のバランス balance によって左右されるべきである」、これが「神の意志だ」と主張します。（訳書では justice を「正邪」と訳したり「正義」と訳したりしていますが、私は「正義」とのみ訳しておきます。また訳者は、balance を「比較」と訳していますが、バランスとしておきます。）

神の意志というのは、西欧思想の枕言葉ですから、ここでは無視しましょう。問題は、ラスキンが、「行為の基準を損得の均衡 balance」からではなく、「正義の均衡 balance」から判断しろと言っていることです。

ラスキンは、「何が正しい行為で、何が不正な行為であるか」を人間は知ることができるが、その場合「正義の結果が、結局他人にも自分自身、最も良いものであるべき」ということが問題だと指摘しています。そして、ラスキンは、「正義という言葉に愛情 affection を含めて」います。

今日、市場競争に打ち勝つために、資本家や経営者は、さまざまな悪いことをおこなっていますが、多くの経済学は、こうした事態を告発する理論を展開していません。ラスキンは、19世紀の中葉に悪をおこなう経済行為を非難し、それを批判しない経済学を厳しく批判しているのです。

こうした問題を労資関係に直結させてラスキンは、「雇用主と職工との間のすべての正しい関係と、両者すべての最善の利益とは、結局これらの正義と愛情とによるものである。」と指摘します。

確かに従来の経済学からみると、ラスキンのこの主張は、いささか飛躍しているように感じられます。しかし、労資関係に正義とか愛情を導入して問題を解く方法は、現実的にみて大変興味深い論点です。

第8 パラグラフ。主人と召使いの関係に「愛情」を。

ラスキンは「雇用主と職工の関係」について、「最も単純な例証を、家庭における」雇用主と召使いの関係において論じます。

ラスキンは分析します。ある主人は、「自分の与える賃金率で、召使いからできるだけ多くの労働をしばらくろうと願っていると仮定」し、召使いをぎりぎりのところまで目一杯働かせようとします。これは主人にとって普通の「正義」であり、主人は「契約を結び」、「その時間とサービスとを得ている」からだというわけです。

そして「その取扱い上の過酷さの限度は、」その限度をこえると召使いは他の人の所へ逃げてしまうから、「家内労働に対する現行賃金率によってきまる。」あるいは「労働の実際の市場価値」の限界によって決まるといふ、経済法則がここにあると、ラスキンは見えています。

ラスキンは、こうした労資関係をどのように経済学者たちが説明するかを問題にします。

すなわち経済学者たちは、主人は「労働の最大価値が召使いから得られ、また社会を通じて還元することによって、その召使い自身に対する最大の利益が得られると断言する」と指摘します。つまり労働市場を通じて決まる賃金が支払われるところが、両者の最大の利益があると見なすということです。

ラスキンは「しかし、これは間違っている。」と批判します。

ラスキンは、「召使いは精神」をもって働いているのだから、「それが最大の仕事をするのは」、報酬のためでもなく、強制によるときでもなく、あるいは量目で給料されるどんな燃料の助けによるものでもない、「そのものの意志ないし心が、それ自身独特の燃料、すなわち愛情によって最大の力に達したときだけである。」と批判します。

ラスキンは、労資関係に双方の「愛情」を持ち込むわけです。労働市場の作用もあるが、召使いが、多く仕事をするかどうかは、仕事に対して、仕事に向けられるべき主人に対する「愛情」の強さ如何である、というわ

けです。

こうした考え方は、昔から存在していたし、現代の労資関係論にも一部取入れられます。例えば、高橋伸夫という人の『虚妄の成果主義一年功制の復活―』(2)という本では、労働者は賃金のためにのみ働いているのではないという側面を強調しています。しかし19世紀にこうした主張は、やはりとっぴな、あるいは超革命的な言辞だったかも知れません。

私は、ラスキンのこうした考えに基本的に賛成しますが、今日的にみた場合、もっと複雑な要因を周辺に配置して主張しないと、安易な人道主義、博愛主義とみなされかねないと思っています

第9 パラグラフ。愛情をもって事にあたる。

ラスキンは、さらに主人と召使いの関係を分析していきます。

ラスキンは、いろいろな主人のタイプをあげて、彼らのもとで働く場合の「問題についての一般法則は、」「主人と召使いとに、ある一定量の活力と思慮とがあるとすれば、彼らは、互いに対立することによってではなく、互いの愛情をつうじて、最大の物質的結果がえられるだろう。」と指摘しています。

つまり、ラスキンは、労働市場にまかせることによってではなく、両者が愛情を通じ合うことによって、物質的にも最大結果があらわれるとみるわけです。

ラスキンは、「召使いからできるだけ多くの労役をしばらくろうとするかわりに、むしろ彼の利益になるようにし、また正当で健全なあらゆる方法で召使いの利益をのばしてやろうと努力するならば、このようにいたわられた人によって、究極的になされる実質的な仕事の量、つまり報いられた利益の実質的な量は、実にこのうえもなく大きいものであろう。」と言っています。

召使いから多くを絞り取るよりは、召使いに利益になるようなことをしてあげれば、彼らは、よく働くであろう、というごく当り前のことが指摘されています。こうした事態は、今日の企業でも、すでにある程度試みて

いることです。

第10パラグラフ。「機動力」としての「愛情」。

ラスキンは、「いかなる場合にも、またいかなる人に対しても、この自己をなくした処置は、最も有効な返礼を生むのである。」といい、「ここで愛情をまったく機動力 motive power」として捉えています。

ラスキンは、この「機動力」としての「愛情」を、「高貴」だとか「抽象的に良い」ものとか考えるのではなく、「普通の経済学者の計算をすべて無効にしてしまう特異な力であると」みなしています。

この指摘は、とても重要な論点です。ラスキンは、「愛情というのは、経済学上の他のすべての動機や条件を無視するときのみ、真の力を発揮するもの」と捉えています。つまり、ラスキンは、愛情を実利的に利用しようとする経済学的な発想では、真の成果をえられないと考えています。

ラスキンは「召使いの感謝の念を利用するという考えで、彼を親切に取り扱えば、諸君はその当然の報いとして、なんらの感謝も、また諸君の親切に対するなんらの対価をも得られないであろう。」「しかしいかなる経済的な目的もなく、ただ彼を親切に取り扱えば、経済上の目的はすべて達せられるであろう。」指摘しています。

労資関係に経済的目的を持ち込まないで、経済的效果をえるというラスキンの考え方は、
相当に難しい問題ですが、しかし決して無視できない論点です。彼の意図をもう少し検討してみましょう。

第11パラグラフ。雇用主と労働者の関係について。

ラスキンは、これまで問題を雇用主と召使いの関係というかなり抽象的な事例から分析しています。ここでもそうした分析がつづきます。すなわちラスキンは、まず「雇用主と労働者との関係のもっとも単純な」関係を、「連隊の指揮とその部下との間に存在する関係」として論じています。

ラスキンは、士官が軍隊を十分に機能させるためには、「自分ではなるべく手数をかけずに、……訓練の規則だけを適用しよう」と思っているとす

れば、……こういう利己的なやり方では、彼の部下の全力を発揮させることはできない。」と指摘します。

ラスキンは、「連隊を最も精鋭なもの」にするためには、「彼の部下と最も多く直接的な個人的関係を持ち、部下の利益にもっとも留意し、部下の生命を最も尊重する」ことが必要であり、「部下が彼自身になつき、彼の品格を信頼する」ことによって「他の手段ではとうてい達せられがたい程度に、部下の実力を発揮させるであろう。」そしてこれを一つの「法則」と呼んでいます。要するにラスキンは、軍隊を機能させるためには、指揮官は、部下に愛情をもって当たらなければならないと主張するのです。それは、雇用主が労働者を効率的に働かせるためには、労働者に愛情をもって接するべきであるということになります。

こうした組織指導論は、巷間に溢れているところのものですが、労資関係という厳しい問題の中にはあまりみられません、決して皆無ではありません。

第12パラグラフ。「製造業者とその職工」の関係。

ラスキンは、単純な事例から「製造業者とその職工との関係のいっそう複雑な関係」の検討に移ります。ラスキンは、ようやく労資間の核心に検討を加えます。

ラスキンは、「合法的な生産と目的のために集まった人々の一団は、」例えば「紡績工の間」には、連隊で想定したように、「連隊長に対する熱烈な愛情」が存在すると考えることは「それほど容易なことではない。」むしろ「通常このような感情に動かされることはない」と指摘し、労資間の難しさを提起します。

ラスキンは、労資間に容易ならざる関係を予想し、「自分の首領のため生命のために自分の命を落とすことも辞さない」と考える労働者はいないだろうと指摘しています。

何故そうなのか。ラスキンは、「召使いや兵士は、一定期間、一定の賃金率で雇用されているが」が、工場主に雇われる「職工は労働需要に従っ

て変動する賃金率で、しかも市況如何によっては、いつ職を奪われるかもしれないという危険のもとで雇用されている」からであり、「こういう不安定な状態のもとでは、いかなる愛情の作用もおこるはずはなく、ただ不満の爆発作用がおこるだけ」だからだと指摘しています。

ラスキンは、安易な労資協調主義者と違って、労資関係の厳しさを直視し、こうした労資関係の不安定性の中で、二つのことに「考慮」すべきであると考えています。

「第一に、賃金率は何の程度まで労働の需要につれて変動しないように調整できるか。」「第二、このようにして決まった賃金率で、職工の団体を雇い、養い、その人数を増減させることなく、旧家の召使いがもっているような、永久的な関心を関係する工場にもたせ、あるいは精銳連隊の兵士のような団体精神をもたせることが、どの程度まで可能であろうか。」と言うことについてです。

第一の論点は、労働者を労働市場の波に放り込むのではなく、むしろ労働市場に支配されない賃金をどのように考えるかという問題であり、第二の論点は、そうして決まった賃金が、労資の関係に真の愛情を感じる関係を作りえるかという問題であります。

第13パラグラフ。労資関係への介入。

ラスキンは、労資関係をレッセ・フェール（自由放任）にではなくて、今はやりの自由市場主義に委ねるのではなく、労働者の「不満の爆発作用」が起きず、安定した労資関係を築くためには、第1に「どの程度まで労働の需要と無関係に、賃金率を決定しうるか」という問題を提起します。

ラスキンは、通常今でも経済学者が考えているような考え方、賃金は労働市場によって決まるという考え方を否定して、あるいは「一般の経済学者が……可能性を否定している」「労働の需要と無関係に、賃金率を決定しうる」ということを主張しています。

ラスキンは、「地上のあらゆる重要な労働と、重要でない労働の大部分とについて、賃金はすでにそのように調整されている」と指摘していま

す。

こうした主張をしたからこそ、ラスキンは、古典派経済学者から袋叩きにされたのでしょうか。では、ラスキンは、労働市場とは関係なく貸金率が決まるという事実をどう論証するのでしょうか。本当にできるのでしょうか。

ラスキンは、病気になっても、安く診てくれる医者にかかろうとはしない日常的な事例をひいて、確かに「労働の価格は、実際につねにその需要によって規定されるのである」が、「しかし、このことの実際的、直接的やり方に関するかぎり、最良の労働はこれまでつねに、不変の標準によって支払われてきたのであり、あらゆる労働が本来そうあるべきものである。」と指摘します。

ちょっとわかりにくい言い回しですが、「最良の労働」は、「不変の標準によって支払われてきた」ということと、「あらゆる労働が本来そうあるべきもの」という二つの指摘がここにはあります。

第14パラグラフ。「貸金の平等」。

ラスキンは、あらゆる労働が不変の標準によって支払われるというそのメカニズムを説明します。人は、何故上手な職人と下手な職人に「一様に報酬を与えるのか」と問うだろうとラスキンは自問自答します。ラスキンは、「確かにそうである。」と答えます。

ラスキンは、例えば、人々は、上手な職人にも下手な職人にも、「平気でおなじ謝礼を払っている」と指摘しています。ただその場合、人々は、上手な職人を選び、下手な職人を選ばないだろうと指摘します。ラスキンは、この「選ばれる」ということに注目します。そして、「選ばれる」ということに「上手な職人の当然の報酬」を見出します。

そしてラスキンは「あらゆる労働に関する自然でしかも正当な制度は、一定の貸金率が支払われるかわりに、上手な職人は雇われるが下手な職人は雇われないということである。」と指摘します。

もう一度言い換えれば、異なった質の労働者に対して、同じ貸金率が支払

われるが、質のいい労働者が選ばれ、質の低い労働者は選ばれないだろうということです。

そしてラスキンは、問題は「これに反して、虚偽、不自然かつ破壊的な制度は、下手な職人が半分の価格でその仕事を提供して、上手な職人にとってかわり、あるいは競争によって上手な職人を余儀なく不十分な金額で働かせことが許されるような場合におこなわれる」。

つまり、労働市場では、下手な職人が上手な職人の賃金を引き下げて、上手な職人にとってかわろうとし、あるいは上手な職人が不十分な賃金で働くことを余儀なくされる、という「虚偽、不自然かつ破壊的な制度」が存在していることである、と見ています。ラスキンは、古典派経済学と違って、こうした労働市場が生み出す事態を悪とみて許さないのです。

以上のように、ラスキンは、第12パラグラフで提起した第一の問題、「賃金率はどの程度まで労働の需要につれて変動しないように調整できるか。」という設問に、賃金を平等に支払うことによって、賃金が労働の需給関係、つまり市場の変動なしに賃率が維持されると答えるのでした。

その正否は、ともあれ、ラスキンの考え方は、極めてラジカルで奇異なものに思われますが、私は、とても興味深く受け取っています。ただしそのためには、強力な人間の意識の介入が必要になるのでしょうか。

第15パラグラフ。第2の問題。

第一の問題について、第二の問題は、「このようにしてきまった賃金率で、職工の団体を雇い、養い、その人数を増減させることなく、……永久的な関心を関係する工場にもたせ、あるいは精鋭連隊の兵士のような団体精神をもたせることが、どの程度まで可能であろうか。」という設問に答えることです。

ラスキンは、マルクスもそうでしたが、国民経済に「必然的に起こる突発的にして広範囲な需要不均衡」が、「正しい労働制度を作り出すにあたって克服しなければならない唯一の重大な困難である」と考えています。

そこでラスキンは、「正しい労働制度」をつくるために、「職人の生産す

る商品に対する一時的な需要の如何にかかわらず、一定数の職人を維持すること」であると指摘します。要するに、一定数の労働者の雇用を市場に左右されず維持することだということです。

こうした考えは日本の終身雇用制の根底にあるものです。

そうしないと、労働者の側では、景気が不安定になれば、中断した際の生活費をも予想した高い賃金が生じてしまう、他方、「近代的な商業活動 modern mercantile operation は、賃金と事業 trade を富くじのようなものにする」と指摘します。つまり労働者は、労働市場の嵐にさらし、資本主の巧みな「利潤」取得のチャンスにさらしてしまうということです。

第16パラグラフ。「雇主側の賭博欲」。

ラスキンは、「近代の商業活動の結果」が、「どの程度必然的であるか」について、すなわち資本主義の利潤追求メカニズムについて「考察」することの検討を保留し、問題を簡単に指摘するに止めます。この点は、『ムネラ・プルウェリス』で詳論されることになりますが。

ラスキンは、資本主義経済が生み出す不均衡は、必ずしも「必然的」宿命的なものと見ず、「ただ雇主側の賭博欲と雇人側の無知低俗から起こるもの」と見なしています。そして「雇主はどんな利得の機会をもみのがすにしのびず、金持ちになろうとあせって、幸運の壁のあらゆる空隙をねらって死に物狂いに押しかけ、そして目がくらんであらゆる破産の危険を犯す」と指摘します。まさに今日もそうになっています。

だから他方、ラスキンは、労働者が市場を通じて、6日適度に働くより、3日激しく働き、泥酔するほうを好む傾向を放置せず、「雇主は、……ふしだらな慣習を改め、」「進歩的な改革を達成する」ことであると指摘します。

すなわち「不安定な利得を求めるような誘惑にとらわれず、確実にやっつけていける程度に、自分の事業を維持していき、それと同時に、労働者にも、失業の不安にさらされながら高い賃金をえるよりは固定給の形式で安い賃金をとらせるようにするか、……」要するに「彼らをもっと規則的な

労働と生活の習慣に導く以外にない」と指摘します。

ラスキンは、こうして資本主義の問題性を指摘しますが、マルクスがこれを体制的に全面否定するのと違って、また古典派経済学がそれを傍視視するのと違って、人の力（教育や意志改革）によって改善することが可能と見るわけです。つまりこれは完璧な改良主義です。ここにラスキン経済学の本質があります。ただしマルクス主義風に改良主義は、悪であり労働者への裏切りであると考えれば、ラスキン経済学はなんの魅力もなくなりますが。

第17パラグラフ。戦闘集団と製造の集団との違い。

ラスキンは、「進歩的な改革」をなしうる雇主がどうあるべきか、つまり資本家論を展開します。ラスキンは、すでに指摘したように、戦闘集団と製造の集団との違いに言及し、前者は「自己犠牲」をもっているのに後者、製造の集団はそうしたものをもっていないと、指摘します。

ラスキンは、イギリスでは、資本家は軍人より低く「評価」されてきたと指摘します。今は、軍人より事業家の方が評価は高くなっているでしょうが、19世紀には、資本家の地位はかなり低かったのでしょうか。

第18パラグラフ。人間の評価。

ラスキンは、資本家の評価をする前に、人間の評価一般について論じています。

ラスキンは、「法律家や医師」へ「尊敬の念」は、彼らの「自己犠牲」にもとづいていると指摘します。例えば、人々の法律家への「尊敬の念」は、彼の「学識や明敏さ」ではなく、彼の「公正」な仕事にたいする「信頼」にもとづいているとみています。それ故、問題の核心は、人々の「尊敬」は、法律家が「正義を第一とし、私利を第二とする」「行為」への「信頼」であると指摘します。医者の場合も同じことです。

第19パラグラフ。資本家の第一目的・利得。

では資本家の場合はどうか。ラスキンは、今度は資本家の評価に移ります。

なおいわゆる資本家という用語について指摘しておけば、ラスキンは、「雇主 master」(訳書66頁 以下同じ)、「製造業者 manufacturer」(67頁)、「工場の所有者 proprietor of mill」(68頁)、「商人 merchant」(73頁)と、いろいろな言いまわしで表現していますが、商人 merchant に製造業者 manufacturer を含めると自ら指摘しています(第22パラグラフの原注4, 75頁参照)。ここではそれらをひっくるめて常識的に資本家 capitalist (79頁)と呼んでおきます。

ラスキンは、「大商社を首尾よく経営するのに必用とする手練、先見、決断およびその他の精神的能力は、」「少なくとも軍艦や連隊の下士官、教区の副牧師に必用な一般的な精神的諸条件に相当する」が、しかし「商業会社の社長 head of a commercial firm」は「自由職業に属する有能な人々」より尊敬されていない。その理由は、「資本家 merchant がつねに利己的に行動するものと考えられている」からであると指摘しています。

資本家が尊敬されるかどうかはともかく、彼らの「第一の目的は、自分のためできるだけ多くを獲得し、彼の隣人(顧客)にできるだけ少なく残すのである」ということは、まさに「資本家 merchant の行為の必然的原理」というわけです。

ところが今の日本では まさにラスキンの言うのとは逆で、ヒルズ族にみられるように、利己的に行動しないで尊敬されるのではなく、利己的に行動することによって尊敬されているという現象、風俗が生まれています。ラスキンはこうした事態に心底反対していたわけです。

第20パラグラフ。もう一つのタイプの資本家。

ラスキンは、こうして利得を第一目的とする資本家について分析したあと、「利己心」ばかりを追求しないよき資本家がいることを指摘します。

ラスキンは、「詐欺」的な「商業」を見極めなければならないが、「利己的なばかりではないような商業を発見しなければならない。」と指摘します。ラスキンは、「商業 commerce」にだめな商業と「ときにはみずから進んで損失をこうむるという観念」認める「真の商業 true commerce」

とを見えています。そして後者によき「資本家」が対応していると考えているようです。

ラスキンは、イギリスのロマン派詩人ワーズワスの親しい友人であると同時に相互に影響しあった関係ですが、ワーズワスの長編叙事詩『エクスカーション』の主人公のような「真の人間」⁽³⁾としての「商人」を発見しています。あるいは、われわれは、イギリス資本主義の歴史の中に、ロバート・オーエンのような博愛的な資本家をしばしば見出すことができます⁽⁴⁾。まさにラスキンは、資本主義の改良の可能性を、よき資本家の出現に求めています。ラスキン改良主義の一つの特徴がここにあります。

第21パラグラフ。資本家の職業論。

ラスキンは、このよき「資本家」について論じます。ラスキンは、まず人間に必要な「五つの大きな知的職業」について論じています。しかしここでは、もっぱら資本家の職業についてラスキンの意見をみることにしよう。

ラスキンは、「資本家 merchant の職業は、文明国民に物資を供給することであると指摘します。そして「すべての人々の本分は、必要な場合にその国民のために死ぬことである。」とかなり過激な前提を提起し、「資本家 merchant が、いかなるときに死を〈必要とするか〉」と問題を提起しています。かなりアフォリズムのきつい言い方ですが、彼の意見を聞いてみよう。

第22パラグラフ。よき資本家。

ラスキンは、「資本家 merchant の本分は、その国民に物質を供給することである」と認めますが、「俸給を得ることが牧師の本分でないように」、「その供給によって自分に利潤をもたらすのが商人の本分ではない。」と指摘します。

ラスキンは、資本主義を認めつつまさに基本的なところで従来から認められている資本主義の基本精神を批判します。ラスキンの改良主義のすごいところです。ラスキンは、巷間広く認められている主張とは逆に、資本

家は利潤追求を第一にしてはいけないということです。

ラスキンは繰り返し言います。「診療の報酬が真の医師にとって生涯の目的ではないのと同様に」、「真の資本家 merchant にとってその報酬は生涯の目的物ではないのである。」と。「もし真の人間ならば、報酬如何にかかわらず……、いかなる犠牲をはらっても、すなわち報酬とはまったく反対のこのためにもなさなければならない」というのです。

すなわち資本家の本分は、「物資を供給することである」から、そのために「彼が取りするものの性質と、それを獲得しあるいは生産する手段とを、その根源まで理解しなくてはなら」ず、「彼の明敏さと精力のかぎりをつくして、そのものを完全な状態に生産し、あるいは獲得し、それがもっとも必要とされるところに、できるかぎりの低価格で分配することに努めなければならない。」と指摘します。

これを一言で表現すれば、資本家は、利潤追求に翻弄されずに、最適な生産、分配をおこなうべきだということでしょうか。相当、空想みたいな話ですが、そうした現実性はあるのでしょうか。

さらにラスキンは、資本家は、「業務の過程で、……よりいっそう大衆の支配者・統治者となる」のだから、「その人たちがどんな生活をおくるかということの責任」をもっており、そして「いかに従業員 men employed に有利にするかと考慮するのが彼の任務となる」と指摘します。すなわち資本家は、よき生産者、供給者たると同時に、よき「従業員」の管理者であらねばならないということです。

私は、少年時代にラスキンの言うような資本家になって貧しい人々を救いたいと考えましたが、マルクス主義にふれて簡単にそうした考えは粉碎されてしまいました。しかし今ラスキンの教えを知ってそうした素朴な資本家論が、必ずしもまったくの空想ではないと感じるようになっていきます。

私は、このよき資本家論は、その後の資本主義の歴史の中で、さまざまな望ましい経営論に姿を変えて発展してきているように思います。例え

ば、今途上国の追い上げで四苦八苦しているドイツは、労働者が経営に参加して、労資が共同決定をおこなう経営システムを作り上げましたが、私は、これなどはよき資本家からよき経営陣という変化をつうじてその一部が実現していると見えています。

第23パラグラフ。よき資本家に求められること。

ラスキンは、資本家がこの「二つの職分を正当に果たすためには」、一般的な努力、「忍耐、親切、熟練と同様に、最高の知能を必要とする」が、それ以上に「必要があれば要求されるような方法で 自分の生命を投げださなければならない。」と付け加えます。

第一の生産、分配の活動については、ラスキンは、第1に、「契約」を遵守すること、あるいは法を守ると言うことでもあるでしょうか、第2に、「供給する物資の完全なことと純良なこと」をあげています。欠陥商品や偽物はつくらないし、売らないということでしょう。

ラスキンは、資本家の職分を果たすために、第三に「必要があれば要求されるような方法で、自分の生命を投げだせ」といっていることは、不当、不正をおこなわず、そうしないために「ふりかかってくる困難、貧乏、労苦をもおそれずに立ち向わなければならない。」ということの比喩だったのです。これは、今風に言えば、資本家のモラルの問題ですね。

競争を前提にすれば、そんなことを考えてはいられないというのが常識でしょうが、ラスキンはそうした自分だけが生き延びる弱肉強食の競争を否定するのですから、そうしたシステムをつくることに成功すれば、ラスキンの考え方は成立することになるでしょう。

第24パラグラフ。よき資本家の労働者への態度。

ラスキンは、つづいてよき資本家が「雇われている人たちの統率者 governor して」如何にあるべきかを論じています。ここでまさにラスキンの労資関係論、労資協調論の核心が開陳されます。

ラスキンは、家父長主義的であると批評されているように、資本家は、労働者に対して「明らかに父親のような権威と責任を負わされている」と

指摘します。ちょっと陳腐ですが、そう言っています。

しかしラスキンの真意は、資本家が「自分の雇っている人々に公正」でなければならないということであり、そのための「唯一の方法」は、我が子のように「自分の使用人をあつか」えということであります。決して逆ではありません。労働者に経営者への尊敬を歩的に求めているのではありません。

ラスキンの指摘は、大変通俗的であります。労資に労資協調の原初的なモラルを要求したものと理解してよいでしょう。

ラスキンは、こうした労働者に対する扱いこそ、「この政治経済学上に与えられうる唯一の有効で真実な实际的鉄則である。」と意義づけています。ラスキンは、資本家が「労働者 workman を自分の息子を選んだであらうと思われるように、つねに必ず自分の職工たちをことごとくそのように遇しなければならない」と指摘します。そうすれば労資関係は良好になるはずだというわけです。

ラスキンは、付け加えます。

「資本家 manufacturer は、どんな商業上の恐慌あるいは危難にさいしても、その苦痛を自分の労働者たちとともに受け入れなければならない。それどころか、労働者たちが感ずるよりも、より多く自分でこの苦痛を負わなければならない。」そうすることは、「父親が……わが子のためにみずからを犠牲にすると同じことである。」と。

ラスキンは、特に労働者に対する統治・管理は、自己犠牲的でなければならないと考えたのです。ラスキンの労資協調論は、資本家にそうとう厳しいですね。

第25パラグラフ。誤った経済学諸原理は 国民の破滅を導く。

以上のようにラスキンは、自分の主張は「すべて正しい」、「永久的かつ实际的に正しい」と指摘し、かつこれまで述べてきた諸説以外の「諸原理は、すべて前提において誤っており、推論において不合理であり、また国民生活の進歩の状態と両立して実施することは不可能である。」と強調し

ます。

そして「今日、一国民として生命を保持していることは、すべて少数の意志強固で忠実な心の持主が」誤った「経済諸原理を、断乎として否定し、軽蔑している」からであると主張しています。逆に言えば、誤った「経済諸原理が受け入れられるかぎり、ただちに国民的破滅を導く」と指摘しています。

以上のようにラスキンは、レッセ・フェールの経済学原理を否定して、経済関係、労資関係に、正義と愛情を持ち込み、経済の正しい運営と労資が公正にして安定した関係に入るべきであると説いたのです。

私は、こうしたラスキンの見解にふれて、一方でかつてマルクス主義者であった時に感じたように、現実の厳しい市場競争、労資関係を無視した空想的な考えではないかという気持ちを感じつつ、他方で、いわば理想的な資本家を想定して、資本主義を否定しないで理想の経済システムを追求していくとは決して空想的でもないのではないかと感じています。

ラスキンの考えは、今日のさまざまな思想に取り入れられて生きています。イギリスのフェビアニズム、労働党の政策、各種の労資協調論、ヒューマン・リレーションズや福祉社会論の中に取り入れられています。ラスキンの主張する理想の経済システムは、現実には部分的ながら存在してきたし、今後いっそう多く存在するようになりうると考えています。そうしたシステムをどのようにして実現するか、一挙に100%実現するのは困難だとしても、10%程度から徐々に比重を増やしていくポリシーを生み出すことは可能ではないかと考えます。

資本主義を全面否定して出現した社会主義は、敗北しましたが、資本主義を修正するうえで大きな役割を果たしてきました。おそらくヨーロッパの社会民主主義的社会主義は、そのままではないにしても、もう一度復活することになるでしょう。私は、そうした思想を補強し、完備する思想としてラスキンの経済システム論は、再生し発展していくことになるだろう

と考えています。

今日は、私の最終講義として、ラスキンの経済論の一端を紹介してみました。ラスキンの経済理論には、多くの注目すべき理論がありますが、残念ながらここでは論じられませんでしたので、べつの機会に論ずることにしましょう。

〈注〉

- (1) ラスキンの『その最後の者にも』、『世界の名著』シリーズ41巻、中央公論社、1971年。ただし本書の訳文は、時々適当に改訳してある。原文のテキストは、The Social and Economic Works of John Ruskin, 6 Volumes, Unto This Last, 1994, Routledge/Thoemmes Press.

本文の引用については、煩雑になるので逐一頁の引用をやめて、各パラグラフのナンバーを示すにとどめた。

- (2) 高橋伸夫「虚妄の成果主義一年功制の復活―」, 2004年, 日経 BT 社。
(3) 前掲書『その最後の者にも』, 73頁の訳注(1)を参照。
(4) 拙稿「イギリスにおける歴史的産業遺産の保存運動と観光資源化―ロバート・オーエンの『ニューラナーク』の場合―」, 『経済志林』第67巻第3・4号, でのオーエンについての記述を参照。